



次 目

法華經の行者日蓮	本多日生
公開狀	本多日生
信行の基調を説ける觀普賢經	井村日成
法華經七譬の意義	本多日生
在病報國論	石田誠生
聖訓摘要	本多日生
生佛一如	田久保末誓

號月二年二十三第



教

第十三號出づ

本誌執筆家

その堂々の内容
各方面の名筆

- 本多 日生
- 後藤 新平
- 床次 竹二郎
- 永井 米藏
- 岩野 直英
- 高島 平三郎
- 志賀 重昂
- 佐藤 鐵太郎

毎月一日 十二日發行 一部金十銭

發行所 東京府荏原郡品川町南品川四二二
教發行所 (振替東京一〇九四〇番)

法華經の行者日蓮

「法華經の行者日蓮」と題して、日蓮聖人が法華經の教旨を實行せられたその意味合に就てお話を申し上げやうと思ふのであります。姉崎博士が「法華經の行者日蓮」と題して意見を發表せられて居るのであります。私は違つた側からお話申上げやうと思ふのであります。法華經の行者日蓮と申せば、法華經を弘める爲に種々の法難にお遭ひなされた、即ち「勸持品」二十行の偈を色讀せられたる點を以て、多く法華經の行者日蓮と稱讀して居るのであります。勿論それは日蓮聖人御自身に於ても「勸持品」二十行の偈を色讀せられた事を重大なる意味にお書きになつて居るのであります。併し今日私が「法華經の行者日蓮」としてお話をするのは、唯「勸持品」の二十行の法難を色讀せられたといふ點だけではなくして、整ふた意味に於て法華經の經旨の實行に就てお話しして見たいと思ふのであります。それ故に最初に法華經に示されて居る如説修行の有様がどういふ風に説かれて居るかといふ經旨の方を先に考へて、さうしてこれを實際日蓮聖人の行はれた方に對照し考察をして見たいと思ふのであります。

大僧正 本多 日生

「如説修行鈔」と題する御遺文がありますが、これもやはり法華經を弘める爲に法難迫害の中に闘つて行く勇ましき有様を述べられて、命に懸けて法華經を護ることが示されて居りますが、それは無論命に

◎紙墓豫約締切

○過般本誌上に紙墓豫約出版廣告せし處、意外に多数の申込みを受けたり。然るに今三十名を得れば豫約數に達するを以て、此際至急申込みあられたし○勸五憲法は徳川幕府のために燒棄せられたるを以て今は精版す、頗る珍書とす○今此の五憲法は鶴岡本を本として長野按察の二本を校合したれば、他に類例なき正確のものなり○本書は再版せず、數に限りあれば有志の諸君は是非一本を備へられたし○申込みには只だ紙墓豫約に應ずとの葉書にて通知さればよし○製本の時は代金引換の事、豫約代金は壹圓外外○申込みは千葉縣長生郡二宮本郷村押日東天社。

本多日生現下著小冊子

(現在品のみで賣切れ絶版になつたものは注文さると餘計な手数料で困ります)

- 修法勸行の心得 一部金十五銭送料貳銭
- 教育勸語と思想問題 十五部金壹圓送料共

名古屋市東區田代町城山 統一編輯局 振替名古屋一〇八一九

多数購讀の節は特別割引御照會下さい

懸けて信仰を貫くといふことが、法華修行の最も大切な所でありませうけれども、さういふ所だけを知つて、法華經を弘めるのは命懸だ、サア何でも持つて來い、頭でも切れといふやうなことだけを覚えて居つても、本當に法華修行の意味が領解されないのではないかと思ひます。それ故に從來のさういふ一般的に偉いもんちや。偉いもんちやと祭上げるやうな式でなしに、この日蓮聖人を敬慕する正しい意味合は無論善智識者として尊敬するのでありますが、モウ一つその奥に日蓮聖人の信じた心の奥には本佛あり、日蓮聖人の奉ずる心の奥には法華經あり、即ち他の言葉を以て言へば日蓮は吾々の法華修行の模範人格者である。「日蓮が如くし候へ。」日蓮が弟子檀那二陣三陣に引續いて俺のやつたやうに追隨して來いといふことが日蓮聖人の思召であつたのであります。

日蓮聖人は上行菩薩の再身で飛切の偉い方ちや。逆も吾々凡夫の思ひも及ばぬといふ風に、この間の距離をだん／＼大きくしてしまつて、さうして向ふは偉い、此方はあかぬといふやうなことで、唯自分の病氣を日蓮聖人にお願をして、どうぞ癒して下さい、どうぞ厄を拂つて下さいと言つて居るが、宗教がさういふ風になる時はだん／＼と貧弱なものになり、法華と言へば太鼓を叩いてさうして聲ばかり張りあげるやうになつて、その信仰意識は低級なものに墮落するのであります。「日蓮が如くし候へ。」と仰せられた、その跡を慕ふて隨いて行かんならぬといふことになると、どうしても一踏張しなければならぬといふ發奮興起する精神がそこに湧いて來るのであります。これが非常に大事な點で、法華經の行者日蓮といふことの解釋にも、日蓮聖人のみが獨り法華經

の行者で、吾々はその行者に教ふて貰ふ所の病人、教ふて貰ふ惱める人ちやと言ふて、自ら進んで法華行者にならうといふ發奮興起する精神のない者が、近頃大分多くなつて居るやうだが、それは明かに間違つて居ると斷定すべきであります。日蓮聖人はどこ迄も吾等法華經を修行する者の導師として、即ち模範人格者として御活動になつて居るのであるからして、それ故にどういふ風に日蓮聖人が法華修行を爲されたかといふことを周到圓滿に理解することが極めて大切である。日蓮聖人のやうな圓滿なる人格者はウツカリするとその人格が分裂して崇拜者が分れて行くやうになる。即ち日蓮聖人の剛健の一面に撞撞して、唯強がりになつて行く一方のみのやうに思ふて居る人もあるし、又或は日蓮聖人の物優しい慈悲に絶つて行き、唯日蓮聖人を頼りに杖とも柱と

もして行くといふやうな、依頼心として日蓮聖人に絶つて行く信者も出て來る。或は又日蓮聖人を模範者として學ぼうとする者も出て來る。又唯日蓮聖人はモウ一も二もなくお題目を唱へて驀地に信仰へと突入したのであるとして何にも考へない、理智を忘れ、道徳をも忘れてしまつて、單に宗教の有難いことだけに突入せむとする者も出て來るのであります。人格の分裂といふことは最もこれは戒むべき事である。格は調節、聯絡があつて始めて値打があるのである。優しい所、強い所、これを切離してはどんな立派な人でも不具で、何の値打もなくなるのである。強い事を言ひ居つても、他面に優しい所があるから、その強い所にうま味が出て來るので、強い所だけになつてしまつたならば、變調者でサツパリ値打はないのである。從來は日蓮聖人を變調者として崇拜す

る者が多かつたからして、日蓮崇拜者の中には何だか出来損ひのやうな者が澤山出来るのである。注意をしないといけない。今日の新聞にもあつたが、白い蛇が居つたので、これを法華信者の家に昇きこめば宜いといふので、三四人の法華信者がその白蛇を祀つてその蛇が吾々人間に幸福を與へて呉れるといふて、毎日御馳走を蛇にやつて居つた所が、大變大きくなつて今は七尺にもなつて居るといふことでありましたが、さういふ風な意味で有難がつて其處へ多數集つて行くといふやうな、實に低級な墮落した所の法華信者が新聞の種を賑はしたり、狂坊主みたやうな者が出来て警察の厄介になつたり、法華行者から社會主義者に成つたといふやうな危険な者も出るのは、これは大聖人の人格の調節せられあるを知らぬから起るのであります。日蓮聖人を正しい意味

に崇拜したならば、そんな者は全く縁も由もない懸離れたものである。全然無干渉なものである。そんな迷信のやうな者や狂坊主みたやうな者と、日蓮聖人との間には、何の因縁も關係もないのである。その點を十分に明にしなければならぬと思ふのであります。それ故に先づ法華經に現れたる所の法華修行の方式を正當に傾解することが必要である、是も從來は觀念行、信心行といふ二つにのみ没頭して、天台は理智觀念の行である、日蓮は信心行である、さういふ簡單な事だけを論争して居つたやうであるけれども、これはやはり佛教觀が偏傾して貧弱になつた以後の産物である。法華經を見ますといふと法華經の修行の方式は洵に能く整頓して居ると思ふ。只今拜誦をしました「法師品」の如きも

是の人は大信心及び志願力 諸の善根力あらむ。

と説かれて居る。是の人とは即ち法華行者である、法華經を受持し讀誦し、法華經の行者を以て任ずる人は、第一に大信心を有し、同時に志願力と諸の善根力とを有することを説かれて居るのである。

なものは小信心とも迷信とも妄信とも名けらるべきものである。大信心といへばそんなものは一遍に飛んでしまふのである。法華經の行者は先づ以て大信心を有せなければならぬ。その信仰意識を明にする必要がある、唯珠數ばかり大きくして聲ばかり破れ聲をしても、決して大信心といふことにはならない。さういふ婆羅門式の低級なものが餘りに多量に混入し過ぎて居る。その大信心が確立されれば即ち一般宗教の上に於て研究せられて居るが如くに、宗教は満足されたる精神に立つて、その中から道義的感情が動いて、そこに志が立つて來るのである。故に大信心の結果は斯ういふことをしなければならぬといふ願望立志がそこに燃立つて來るのである。それが法華の修行なのである。いつまで行つても精神には何等の志願力も燃えない、唯聲ばかり大きくしても、

せなければならぬ。この大信心といふことは、大は優れて居るといふ意味であつて、信仰の相手方に就ても最も優越せる本尊がある譯である。自分の信仰意識の方に就ても他の宗教信仰よりは卓越したる意識を具へ、さうして法悦歡喜慰安力も強大であつて、如何なる境遇に居る者も十分の満足法悦を味ふて遺憾なき状態に居る人が、即ち大信心の人と言はれるのである、法華行者は第一に大信心を確立しなければならぬ。蛇を拜んだのでは、對手は蛇であるし、此方の量見も碌なものでないからして、そん

なものは小信心とも迷信とも妄信とも名けらるべきものである。大信心といへばそんなものは一遍に飛んでしまふのである。法華經の行者は先づ以て大信心を有せなければならぬ。その信仰意識を明にする必要がある、唯珠數ばかり大きくして聲ばかり破れ聲をしても、決して大信心といふことにはならない。さういふ婆羅門式の低級なものが餘りに多量に混入し過ぎて居る。その大信心が確立されれば即ち一般宗教の上に於て研究せられて居るが如くに、宗教は満足されたる精神に立つて、その中から道義的感情が動いて、そこに志が立つて來るのである。故に大信心の結果は斯ういふことをしなければならぬといふ願望立志がそこに燃立つて來るのである。それが法華の修行なのである。いつまで行つても精神には何等の志願力も燃えない、唯聲ばかり大きくしても、

その精神状態は悶へて居るやうな、悲鳴を擧げて居るやうなものを以て、法華行者とは斷じて言ふことは出来ない。その志願を吟味すると、大小があり軽重があり、或は偏り整ふといふ關係があるからして、その志を大にし、且つ之を整へて立派な志願力を立つる所に法華經の教旨は存するのである。それに基いて實行するのが法華修行の心得である。自己に省みて何等の志も願望も持たぬものは、法華行者ではない。その志願力に導かれて、これを事實に現さむとするのであるから、そこに諸の善根力となつて、様々なる道德的行爲が活躍をして參るのであります。斯様に信仰の慰安を本としてそこに志願を確立し、志願に導かれて善根を實行する所に、法華の修行は成立つと説かれて居るのである。從來この注意を怠り難敷なる信仰を鼓吹し過ぎて居る。それから斯様

これは「法師品」の一節を申述べたのであります。が、同じ「法師品」の他の所には三軌といふことを説かれて、法華經の爲に盡す三つの心得を示されて居る。第一は如來の室に入り、第二は如來の衣を着、第三は如來の座に坐してこの法華經を説くと云ふのである。その如來のお住居になつて居る室といふのは、他に在るのではない。汝等の心の中に慈悲心が動いたならば、その慈悲心の發動する所が如來の室であると説かれた。これも自分の心それが即佛だといふやうな理論とは違ふのであつて、此方の慈悲の心が發動すると無限絶對の尊とき佛が、この人の心を法座として、其處へ來臨影護し給ふといふことに感激をする情様を言ふのであります。その如來の室に入つて如來と共に居る。一番尊とき無限絶對の御佛が吾が心の中においで下されたといふことを確信

なる信仰なり志願なり善根なりのその心を常に引き立て、引き立てして下さる唯一の力を、そこに置いて置るか、それは如來と共に宿り、如來の手を持って頭を摩でられると説いて、慰安の源を佛様に置いて居るのである。斯くて法華經を修行する者は如何なる淋しい處に獨り寝て居つても、側に尊き佛様が共にお寝み下されて居るのである、人は眠りても如來は頭を摩で、善哉と愛させ給ふ、如來と共に起き、如來と共に寝、如來と共に働いて居るといふことが、法華行者の唯一の力と成つて來るのである。蛇に頼んだり狸に頼んだり、或は鏡を引いて見て當つたとか當らぬとか、又八卦を見て中つたとか中らぬとかいふやうなことを以て、決して法華の信者とか行者とかいふべきでない。如何なる場合に處しても惑ふ所なき人、これを信力決定と申すのである。

して、その感激の喜びに満ちた精神の下に、法華經を説けよと仰せられたのであります。第二の如來の衣を着るといふのは、一切衆生の中の柔和忍辱の心是れなりと説き、優しい精神、困難に堪えて行く心、又爲し難き事を貫かうとする精神を、柔和忍辱の心と申すのである。唯柔和の一つだけではない、優しい心から出てさうして困難の中に立つても、弱らない勇氣、優しい精神と氣とが調節されて居る意味合を忍辱の心と申すのである。作難を能く作すと説かれ、作し難きを作し遂げる力もこれを忍辱の精神と申すのである。それ故に忍辱の鏡とこれを説かれて居る、そこには聞ふの精神を有つて居るのである。先方から悪口を言はれても、酷い目に遭はされても逃げて歸つて布圍を被つて小さくなつてしまふのでない、忍辱の布圍とは書いてな

い。忍辱の鏡を着て奮闘せよと仰せられて居るのである。

今一つは「如來の座とは一切法空是れなり」と申して、小さな感情に囚はれないやうに、執着心に囚はれないやうに、宗派の感情に囚はれないやうに、敵意や味方ちやといふやうな恩怨の感情に囚はれないで、正々堂々正義の在る所に向つて進んで行くのを、これを一切法空の座と申すのであります。

この如來の室と云ふが慈悲の心に當り、如來の衣と云ふが忍辱の心即ち優しい所から出て勇氣を振ふに當り、如來の座とは一切法空であつて高潔なる智慧に當つて居ると思ふのである。法華修行の人は慈悲心と勇氣と調大なる智慧とを具へて、法華經の爲に奮闘せよと示されて居るのである。この如來室、と如來衣と如來座の三つは、重い意味になつて居る

て居るのである。「諸佛の室宅の中より來り、發菩提心に至り、菩薩所行の處に住まる」と仰せられた、この經文も佛様の慈悲と法華經とが離れないことを十分に示されて居る。さうして吾々の發心信仰の所に法華經は來るのであつて、その信仰から導かれて菩薩行を實行して居る處に法華經は住まるのである。又法華經の終りの「勸發品」に再び法華經の精神を説かれた一段がありますが、そこには「四法成就」と申して、この法華經を得むとする者は四つの事柄を忘れてはならないと説かれた。

第一は「諸佛に護念せらる。」佛様に護られて居るといふ、佛の大慈大悲の御心に包まれて居るといふことを忘れた時、法華經は汝の手より去つてしまふことを説かれたのである。佛様の慈悲に感激する精神のないものが、どれ程いやがれ聲を振絞つて

のであります。以上は「法師品」だけでお話ししたのであるが、廣く法華經全体に亘りて大事の所を考へると、開經の場合に「來至住」といふことが説かれて、法華經はどこから出て來てどこへ至つてどこに住まるかといふ來至住を解釋せられて居る。

是の經は本と諸佛の室宅の中より來り、去つて一切衆生の發菩提心に至り、諸の菩薩所行の處に住まる。

と仰せられた。このお經は佛様の慈悲の御心の中から出て來るのである。法華經は箱の中から出て來るものでなく、本屋から買ふて來るものでもない、このお經は佛様の慈悲の御心の中より現はれたのである。さうしてどこに行くかと言へば、吾々の菩提心が起す、發心——信心の心が動けば、そこへこのお經が來たり、菩薩行を實行して行く處に住まつ

も、法華經は疾くその人から離れて仕舞ふといふことを説かれたのである。

第二は諸の徳本を植ゆると申して、善い事をするのである。徳本といふのは道徳であります。徳は本、財は末といふ所から來たので、一切の事柄は徳が本であり、人格が本であるからして善い事を徳本と云ふ。その善い事を實行することが、即ち法華經の修行であります。

第三は「正定聚に入り」と申して、善い事をしやうとしてだん／＼理想が伸びて行くと、獨りばつちでは大した仕事が出来ないからして、志を同じうする正義の團結に加つて、高遠なる大事業を完成せむとするが爲めに、正定聚の團結に加盟せよと申すのであります。

第四は「一切衆生を救ふの心を發す」と説かれて、

慈悲の精神が活き／＼として居らなければならぬのである。

佛様に護られて居ることを忘れてはならぬ、道徳を行ふ事を忘れてはならぬ、正義の團結に加らなくてはならぬ、慈悲の心をいつも／＼活き／＼させて置かなければならぬ、この四つを忘れさへしなければ法華經は汝の手に歸するとお説きなされて居るのである。

尙ほ結經の「觀普賢經」に就て考へましても、法華經の修行はどこ迄も自分の汚ない心を清めて、即ち懺悔罪障消滅を祈つて、清い精神の下にだん／＼善い事をして行くといふ五種の懺悔法を説かれたのが、結經の精神であります。それ故法華修行としての一貫して居る所を考へて見ますと、どうしても今の志を立て、道徳を行ふて、菩薩の行動をすると

地獄へ行つて居るぢやらうといふことが御遺文の中に明記されて居るのであります。

人は口に法華經を讀めども、心には讀まず、心に讀めども身に讀まず、日蓮が一類は色身二法に讀む。

といふ實行を以て法華經を弘められたのである。

斯様にして法華經の修行は整頓した所謂宗教的であり道徳的である、而もその道徳の意味合が非常に能く整ふて居つて、個人より社會、國家、人類にまで及んで、全人類を指導するに足るべき教を有つたものが、法華經であると私は信じて居るのである。私は曾て孔子の事に就て考へた時に、孔子が自分の事を言ふて居る。弟子の子路といふのが葉公といふ人に出會つて、「あなたのお師匠様の孔子はどんな人か？」と聽かれたが、答辯が出来ない。歸つて來て

いふことが伴はなければ、唯法華經を讀んで居るといふことだけでは、法華の修行とは言はれないのであります。法華の信仰もなく又それに導かれた德行もなくして、口だけで法華經を讀んで、それで法華行者と許容されるか許容されぬかといふに、傳教大師はこれに答へて、「心なくして經を讀む者は、蛙が鳴いて居るのと同じもの」と云はれ、日蓮聖人は更に強く言はれて居る、片海の圓智坊といふ者が在つて毎日法華經を三部づゝ讀み、一字三禮して法華經を書いたので、法華經の文字を一字書いては三べん立つてお辭儀をするといふことで、遂に六萬九千三百八十四餘文字を寫し終つたけれども、併し彼が如き者は必ず地獄に行くといふ日蓮聖人は斷言された。詰り彼は黒死病（今のペストのやうなもので）に罹つて眞ッ黒ケになつて死んでしまつた。これらは確に

孔子に相談をした。「葉公が先生は如何なる人かといふことを聞かれたけれども、私は答へることが出来ませぬでした。何と答へたら宜いでせうか」と言ふと、孔子が言ふには、何もそんな事で困ることはないぢやないか、俺の事を尋ねられたら斯う云ふ風に言ふが宜い、と孔子自ら人格の説明をされた有名な言葉がある。

憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘れ、老の將に至らむとするを知らずと云爾

斯う自分の人格を言ふたのである。憤を發して食を忘れといふことは、立派な人間にならう、修養を完うしやうと發奮興起したる精神であつて、時には食を忘れることもあり、十二時になつたも知らずに、一生懸命修養の爲に本を讀んだり、物を考へて、立派な人に成らなければならぬといふ心を貫いて來

た。憤を發して食を忘れ、樂んで以て憂を忘れ、日々のその仕事を樂んでやつて居るから、年の取るのも知らないで愉快に活動を續けて居るといふことを言つたのである。東洋の思想は大なる共通點がある。憤を發して食を忘るゝといふは、志を立つる志願力であり、樂んで以て憂を忘るゝといふは大信力であり、老の將に至らむとするを知らずといふのは、諸の善根力を屬んで、日も亦足らずに善い事をして居るのであるから、この三つが先に言ふた法華行者の大信力、志願力、善根力の三つに一致して居ることを認むるのである。なか／＼古聖賢の考といふものは偉いもので、釋迦と孔子が何も打合したのではなからうけれども、孔子自ら自己の人格を説明したのと、釋迦が法華行者の人格を法華經で説明せられたのと、その事が符節を合すが如くなつて居るのは、實に驚

日蓮が流罪は、今生の小苦なれば、なげかはしからず。後生には大樂をうべければ、大に悦ばし、大に悦ばし。

と結ばれた。斯様な喜の精神は、到る處に發露して居るのであつて、龍の口の頸の座の時にも、今將に頸切られむとして「これ程の喜びを笑へよかし」と云ひ、聖人の御心では、その儘頸を切られても法華經の御爲に命を捧げることは、こんな喜びはないと法悦に生きて居られたのであります。而もそこには飾りもない。これ程の喜びを笑へよかしとは、御心その儘發露された尊ときお言葉と考へるのであります。「如説修行鈔」にあの激しい事を書かれた終りに、

縦ひ頸をば祭にて引き切り、扇をば杖録を以てつゝき、足にははだしを打つて鎌を以て捫とも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經、南無妙法

歡に値すると私は思ふのであります。

そこで斯様な法華經の意味合を以て日蓮聖人の御實行遊ばされた所を考へますと、日蓮聖人は完全に法華經の教旨を實行せられた人であります。唯豆太鼓を叩いて南無妙法蓮華經と言つて、千ヶ寺のやうな事をやつた人では、決してないのである。最初から法師品の大信力、志願力、善根力の事に就てお考へになつた。日蓮聖人の信念は大信力であつて、その戴く所の御佛は壽量品の絶對無上の本佛であらせられる。さうしてそれを信じ給ふ所の熱烈な情操が有ゆる機會に於て現はれて、それが志願力善根力となつて居る。御佛に感激せられたる結果、自ら心に満足を得て居らるゝ、歡喜の有様もあざやかなものであつて、「開目鈔」の結文は「大いに悦ばし、大いに悦ばし」となつて居る、佐渡の雪中に筆をとつて、

蓮華經と唱へて唱へ死に死するならば……といふやうな激しい事をお書きになり、終末には慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり、あらうれしや、あらうれしや。

と結ばれて居るのであります。「顯佛未來記」にも「今年今月萬が一も身命のがれがたきなり。若し法門の事を尋ねたければ弟子にこれを問へ、貴方が手紙を寄越す時分には日蓮この世にゐないかも知れぬ、その場合には法門の事は弟子に尋ねて呉れ。日蓮はこの手紙を送るのが最後かも知れぬ、といふやうな悲痛なことを言つて居られる所に、「今年今月萬が一も身命脱れがたきなり」と言ひ、その直ぐ次に、悦しい哉、未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らむことよ。

今年今月佐渡ヶ島に於て殺されても、直ぐお釋迦様

の處に歸るのちや、と喜びの心をお書きになつて居るのである。

斯様に大信力の激濁たる所を味はなければなりませぬ。法華行者は只強い／＼といふて腕を捲るのではなく、信念強盛と言つて、他面に喜びの精神が強大なものでなければならぬ。だから法華行者は肩怒らすよりもニコ／＼しなければならぬ。法華行者といふたらいつもニコ／＼して居る。法悦歡喜に満ちて居る所に大信力の光がある。志願力に於ては、我れ日本の柱とならむ等と誓ひし願やぶるべからずと仰せられた。國に取つては日本の柱を以て任じ、一切衆生に對しては大導師を以て任じ、日蓮佛勸を蒙むれりとの使命に生きて、内には佛法を整頓し、外には思想の調節を圖り、立正安國、往いては皆歸妙法の域に達したいといふやうな大志願を懷いて奮闘せ

を頼みにしたものでない。日蓮が一門は假令教は少くとも正義を護つて行くからして、必ず大願を達することが出来るといふ、正義を中心にしてどこ迄も濁らぬやう、紊れぬやうに、苦節十年、苦節百年、どうぞしてこの正義を貫徹したいといふのが日蓮聖人の思召だつたと私は確信するのであります。今日でも洗ひかへて假令十人でも百人でも正義純潔の者を以て日蓮の門下として、あとの腐つたものは悉く放逐してしまつても、その方が宜いのである、それ程聖人の志願は正義に燃えて居たのである。

さうして諸の善根力といふのは實に立派に現はれて居るので、法を傳へられることも、佛に奉仕せられることも、國をお護りなさることも、勤王の大義も、一切衆生を救ふの慈悲も、親に對する孝心も、弟子を愛することも、到るところに有ゆる善根力を發

られた。その志願力のあざやかなことは實に立派なものである。弟子信者に對しても、願くば我が願に力を副へよ。お前等は別に考へなくとも、日蓮の立てた志願に力を添へよ、一切僧俗は日蓮を中心にして、お前等は同じやうにこの日蓮の志に参加してやつて呉れといふやうなことを仰せられた。それで日蓮が弟子檀那、日蓮が一類は……と斯う仰せられて居るのである。その燃ゆるが如き大志願力に参加せよ、その中に加はるならば、蓬萊山には毒なく、崑崙山には石なきが如く、この日蓮の團結の中に入つたならば毒も藥となり、石も珠となるといふ位に言はれた。今のごんご法華のやうなものを産出するとは夢にも日蓮聖人は考へてお居でなさらない。實に清い／＼立派な結合を發達さそうとの思召であつた。日蓮聖人は正義硬骨を以て任じた人で、多數

揚せられた、古來日蓮聖人はご道德の各方面を整頓して居る人はない。宇宙的に考へても宗教の信仰情操が活き／＼と燃え立つて居り、道德的には大慈大悲の心が溢れ、國家的に考へれば立正安國の精神があり、社會的に考へても社會の平和を建設し、社會の向上を促す運動となり、個人的にも有ゆる點に於て燦爛として光を放つて居るのである。唯法華信者と云へば太鼓を叩いてしやがれ聲を出すといふことに、日蓮聖人の遺風を汚がした、其罪は誰が受けるのであるかと私は慨嘆に堪えぬのである。

これは大信力、志願力、諸の善根力に就て申したのであります。他の如來の室に入り、如來の衣を着、如來の座に坐して法を説くといふのは、日蓮聖人はその通りに實行なさつて居る。又開經の「諸佛の室の中より來り、衆生の發菩提心に至り、菩薩所行

の處に住まる」といふことも、日蓮聖人のあざややな事蹟に於て一點疑を容れぬ。「敬發品」の諸佛に護られ、諸の徳本を植え、正定聚に入り慈悲の心を發すといふ事も、一々潑刺として動いて居る。お題目を唱へて信心するのは無論大切であるが、それは一切を纏めて、大信心をばお題目を以て代表し、志願力も題目の聲に依つて鼓舞されて居り、諸の善根力も南無妙法蓮華經と唱へれば活氣を増すといふ風に、題目を以て大信心、志願力、善根力を刺戟鞭撻して行かなければならませぬ。

ごうぞ斯様な意味に於て法華經の教旨の完全なること、日蓮聖人がこの尊とき教旨を殘らず圓滿に體得せられ、人格を以て範をお示しになつた事、釋迦牟尼佛は教を以て、法華經として吾々に傳へ給ひ、日蓮聖人は身に體験し活現して、人格を以て導き給

ふたのである。吾々には釋尊あり法華經あり日蓮あり、決して惑ふことはないといふことをお話しして、日蓮聖人の報恩の萬一に捧ぐる次第であります。(完)

漢詩

松尾 皷城

賀恩師本多大僧正誓甲

東西學博解人迷 壇上說來氣吐霓
還曆六旬身更健 蓮聖續統座獅視

其二

大海洋々引百川 滔々辯舌若流泉
德高心淨所人仰 長占斯壇教化權

遠藤北嶺曰、足令大僧正爲重

國體擁護

楠子七生誓 精忠屬此曹
由來重正義 乃作奉公號

其二

天地正大氣 凝成金鐵鷹
陽々護斯土 皇祚一條長

北嶺曰、二首有正氣凛々之想

清水龍山師への回答公開狀

拜啓御送附相成候日宗新報新年號附録に掲載の本尊義に關し時友仙治郎氏との間に往復せられたる御高説正に一讀仕候 文中「此論篇を以て敢て本多日生師に對する公開狀に擬す」と御記載相成居候も該議論の當否は貴師と時友氏との往復にて既に決着致居候を殊更に同じ事を繰返して徒に歸趣を紛雜に陥らしめつゝあるかに被存候 予は貴師の所謂「内慎重に互に相讃仰すべきものにして外新聞等に公開すべきもの」非ず眞に勿休無く内信徒を迷はし外他門に駁ぶ」との言に同意仕候 貴師の御所論の如きは予が本尊論講述に當りて充分に考慮致せし次第にて予の考察外の點は一も無之故に予の既刊本尊論中には貴師の疑義の如きは分明に講明辯折し盡したる事と信じ候 貴師の予に對する御所論の餘りに予の主張を僻付けられたるを見て頗る解し兼ね居る次第に有之今一度改めて虚心に予の本尊論を御通覽被成下候はゞ何より仕合と存候 予は餘まり複雑煩瑣なる論議は却て信解を傷け候かに思はれ同じ事を繰返して歸趣を紛雜に陥らしむるは相互に慎むべき事かと存候 貴師の御高説も御發表の事であり予の主張も諸種の出版物に依りて世に發刊せられ居る事に候へば予としては改めて貴師と時友氏との往復に對し論議辯難を致す必要は無之候右の次第御賢諒を仰ぎ度候 敬具

昭和二年一月十二日

本多 日生

清水龍山殿

信行の基調を説ける觀普賢經

(第七回)

大僧正 井村日 咸

昨春自坊罹災以來引續き内外多事の爲め疲弱執事し得ざりし事は讀者諸氏に申譯なき次第に有之在に陳謝仕り候。爾後は怠慢なく起稿可致御誠恕を乞ふ。

七、普賢の依報を見るを明す

普賢菩薩、身量無邊、音聲無邊、色像無邊、欲來此國、入自在神通、促身令小、閻浮提人三障重故、以智慧力、化乘白象。

(下略)(四七七、八)

此一段は普賢菩薩の乗つて居らるゝ白象の姿を説明してあるのである、菩薩は我等閻浮提の人の爲に應化せらるゝに當り、其本體を此世界の人に適當なる様に少ならしめらるゝ、其本體は身量無邊音聲無邊色像無邊と言ふから無限大のものであるが、それ

では此世界の人々を教導する事は出来ない、そこで自在神通に入つて其身を少ならしめられたのである。此は普賢菩薩に限つた譯ではない、法華經の妙音品には妙音菩薩が釋尊の會座に列なる爲に此世界に來られた時に身体を小さくせられた事が説いてある、佛陀が此娑婆世界に降誕せられた時に丈六の身体をお示に爲つたのも同じ意味で佛陀御自身の必要に依るのでなくして、所化の衆生の爲に應せらるゝのである、然るに後代のものが自身の間たることを忘れて、應化の佛陀を丈六劣應の佛と輕じて、空想の佛陀を作るに至つたことは、佛陀設化の御思召を理解せざるより起つた謬想である、今經の文に閻浮提の人は三障重きが故にと仰せられたるは、我等の

罪業重くして佛陀に近寄り得ざるが故に、佛菩薩は和光同塵して下界に下り給ふと云ふ事で、佛の事を彼此言ふ前に我等自身の罪深きことを反省せねばならぬ。

今普賢菩薩は我等の爲に其智慧力を以て、化して白象に乘れりと言はれて居る、此白象を普賢菩薩の依報と言ふのである、我々の信仰は實在の佛陀の御姿を見奉らんとして渴仰戀慕の狀を生じ、熱烈なる信仰と爲るのであるが、我等は容易に佛陀の御姿を拜することは出来ないが、普賢菩薩は此を憐んで、我等を適當に御指導下さるゝので、先づ自身の姿を御示しに相成る、其一步前に乗つて居らるゝ白象の姿が我等の前に出現する、此一段は其白象の形姿が詳細に説明せられてあるのである。

經文は省略したが、今經文に依つて大体お嘲致さうと思ふ。此象は白色で、其白さは白の中の上れたる者であるから、高尚な何とも言へぬ上等の白さで

ある、雪山の雪の白さも譬へに爲らぬ様な白さと言はれて居る、而して其象には六本の牙がある、身の丈四百五十由旬高さ四百由旬と經文にはある、ちと大き過ぎる様にも思はるゝが、兎に角立派な白象と思へば宜しからう、其牙の端には池があつて、其池の中に蓮華が開いて居り、其蓮華の中に樂器を持つた天女達が居つて音楽を奏して居る。象の脊上には金鞍ありて七寶を以て校具し其金鞍の四方に七寶の柱がある、それも種々の寶玉を以て莊嚴してあり、其中央に摩尼珠を以て造つた蓮華臺があると云ふ様な形である、經文には更に詳しく説かれてあるが、必要な事でもないと思ふ故略して置きますが、斯ふ云ふ立派な白象に乗つて普賢菩薩は御出現に相成るのであります、最初には此白象が現はれて、乗つて御座る普賢菩薩ははつきり見ることが出来ないものである。

八、普賢の眞身を見るを明す

有_レ一菩薩_一結跏趺坐名曰_二普賢_一身白玉色五十種光以爲_二頂光_一身諸毛孔流出金光其金光端無量化佛諸化菩薩以爲眷屬安祥徐步雨_二大寶蓮華_一至_二行者前_一其象開口於_二象牙上_一諸池玉女鼓樂絃歌其聲微妙讚_二歎大乘一實道_一（四八〇、九）

第八段は白象に乗つて居らるゝ普賢菩薩を見るの
ではあるが、次の第十段の處に禮佛悔力の故に普賢
を見るにあつて、其時に普賢菩薩の全体を明瞭に見
ることが出来るので、今は但はんやりと普賢菩薩の
御姿を見る丈のことである、未だ信仰の力が薄弱で
ある故に充分に見ることが出来ないで、白象の上
乗つて居らるゝ普賢菩薩の御身より光明を出し給ふ
の有様が目に映るのである、而して白象の牙の上に

居る天女達が音楽を奏して大乘の法を讚歎せらるゝ
ことを見得るのである。

九、行人の禮佛讚法を明す

行者見已歡喜敬禮復更讀誦甚深經典
遍禮十方無量諸佛禮_二多寶佛塔及釋
迦牟尼佛_一並禮_二普賢諸大菩薩_一發_二是誓
願_一若我宿福應_レ見普賢_一尊者遍普示_二我
色身_一作_二是願_一已晝夜六時禮_二十方佛_一行
懺悔法讀_二大乘經_一誦_二大乘經_一思_二大乘
義_一念_二大乘事_一恭敬_二供養_一持_二大乘者_一
視_二一切人_一猶如_二佛想_一於_二諸衆生_一如_二父
母想_一（四八一、六）

既に普賢菩薩の御姿をばんやりと見ることを得た
が、それでは満足することが出来ない、何卒しては
つきりと御拜みたいと言ふ者が起つて、そこで更に

誓願を立て、其誓願を立てるに就て、其準備行為と
して、一、經典を讀誦する、二、十方の佛、多寶佛
塔、本佛釋迦牟尼佛及_二諸大菩薩_一を禮拜するのである、
現在我宗に於て大曼荼羅を信仰の對象として、其御
前に讀經唱題するのは此義に當るのである、大曼
荼羅の中に十方無量の諸佛多寶如來本佛釋尊及び本
化迹化等の諸大菩薩の列なり給ふ、其御前に禮拜を
行じ、經典を拜讀するのは我等の信仰が本佛世尊に
渴仰し奉り、一心に佛を見奉らんとするに就ての準
備行為である、其準備行為を終つて、誓願を起す、
其誓願は「若し我宿福あつて普賢を見奉るべきには
尊者遍普して我に色身を示し給へ」と云ふのである、
普賢菩薩の御姿を遍普く御示し下さる様御願するの
である、佛身を見奉る其前に御手引を蒙る普賢菩薩
の御姿を拜せんとするので、我等本化の教徒の信仰
には本化の菩薩の御手引を受くるのであるから、本
化の菩薩の御姿を拜せんとする誓願を爲すのである、

斯様に誓願を立て、此を實現せんとするに就ては更
に一段の努力を要する、それは我々行者の意志が大
乗の教に一致する様にせねばならぬ事である、此點
は大切な事である、現在の信仰者は形式は一應整ふ
て居つても、其意志が大乘の經意に叶はぬものが澤
山ある様に思ふのである、それでは信仰の目的は達
せられぬであらう、此一段に其意の持ち方が説かれ
てある、「是願を爲し終つて晝夜六時に十方の佛を禮
し懺悔の法を行じ、大乘經を讀誦し、大乘の義を思
ひ、大乘の事を念じ、大乘を持つ者を恭敬供養し、
一切の人を視ること佛の想の如くし諸の衆生に父母
の想の如くせよ」と説かれたが、此御文は我等信仰
者の根本的心得を御説き下されたのである、大乘經
典には我等が日夜身心に犯す罪惡を消滅せしむべく
其根本哲理を説いて諸經の實相は眞如平等の一理な
ることを明かした、然るに衆生は此平等の一理なる
ことを誤解して、我他彼此の差別の念を起した、茲に

諸の罪惡を生ずるの根本が發生したのである、我
他彼此を差別するよりして我を愛し他を憎むの心と
爲り、我の爲に利益を計らんとするに至つた、此が
則ち惡業と爲つたので、其根源は正しく平等の理に
迷ふたが故である、そこで今日の我等が苦惱の生、活
より脱がれんとするには此根本の根源を除去するの
外は無い、今大乘經典は我等に其平等一如の原理
を教へて、其本性に立還らしむべく其方法等が示さ
れてある、其經典を讀誦すれば其意義を領解するこ
とが出来、但に讀むと云ふ丈で其意義を領解する
ことが出来ねば、それは蓄音器である、佛陀が經典
を讀誦することを御勸めに相成つたのは經典を理解
せしめる爲である。

現今の様な蓄音器的讀誦は無意義である、讀誦其
事が何等の功德と爲すべきものではない、讀誦其
のを功德と考へたのは滅後に於ける一種の墮落信仰
に外ならぬものである、故に今の經文は引續いて「大

く見て居るのは何うしたのか、忠孝の二道も道を
尊ぶ意志が充分に培はれれば意味を爲さぬのである、
其根本を培養するを忘れて、徒らに末節を論じても
其効果は擧がらない、近時流行の學校騒動なるもの
は全く師長恭敬の道徳を輕じたるより起るものであ
る、今經は教の傳統を尊重し師長恭敬の大道を示し
たものである、其根本より出立して一切衆生に對す
る時、凡て佛の如く父母の如く敬意を表することが
出来るのである、法華經には常不輕菩薩の因縁を説
かれたが、如何なる人に向つても禮拜を行せられた
事は一切衆生を佛とし父母として尊敬を拂はれたの
である、斯る思想は大乘教の根本原理と爲つて居る
一如平等の眞理を事實に示されたのである、我々凡
夫には一如平等の道理は比較的容易に理解し得らる
ゝが、實際問題に觸れた場合は、自我を愛するの念
強くして、却々他人を自分と同様に考へることは爲
し得ぬのである、そこが凡夫である、其考が無くな

乘の義を用ひ大乘の事を念す」と説かれた、讀誦す
れば、其經文の意義を能く思惟し、其所説の事實を
憶持せねばならぬと云ふ事で、他の場合に但讀誦と
あつても常に此議を思ひ、事を念する事は當然の事
である、讀誦するとあるから讀誦すると云ふのは、
俗に言ふ門前の小僧習はぬ經を讀むと同様で意味も
分らず嘲る丈である、九官鳥のおはやうと同様であ
る、こんな讀誦は決して御獎勵に爲つては居らぬ、
大乘の義を思ひ大乘の事を念じた結果は我等が精神
は大乘の教に依つて、我見を捨て、平等一如の心地
に住して一切衆生に對して顯はれねばならぬ、その
顯が次の「大乘を持つ者を恭敬供養する」こと、
「一切の人を視ること佛の如く父母の如く想ふ」こ
と、に成るのである、大乘を保つ者を恭敬供養する
とは師匠に對する敬意を表すること、一切の道徳
の根源は師を敬ふに發して居る、師を敬ふことは道
を尊ぶ所以である、近代の道徳は師を敬ふことを輕

らなければ成佛は思も寄らぬ事である、佛に成つて
自我を骨張する様に考へて居れば飛んだ間違であら
う、少くとも凡夫の差別想を離れて行く處に佛道は
増進せらるべきであります、今は自己の我見を改悔
捨離し、平等の心地に住して、普賢菩薩を見奉らん
と專念大乘經典の意義を思惟して居る有様を御説
に相成つたので、末代に佛法を行するもの、心得と
して大切な一段である、此文の中に「懺悔を行じ」
と云ふ文がある、懺悔の事は此經の主要なる行法で
あるが、後に詳しく其相狀を説明して居る故此には
畧して擧げてある、佛法の修行には懺悔は終始伴ふ
て居るので此を忘すれば佛法修行に入ることは出
來ぬと云ふてよい位の大切な行法であるが、此も現
在の墮落せる信仰界には言葉のみ殘されて實質を失
ふて居るの状態である、それでは佛法を修行する入
口にも到着しては居らぬことに爲る、各自の過罪に
就ては反省懺悔することに於て其罪過より脱し得る

ことが出来るのである。

一〇、禮佛悔力の故に普賢を見る

作是念己普賢菩薩即於眉間放大人相白毫光明。此光現時普賢菩薩身相端嚴如紫金山端正微妙三十二相皆悉備有。普賢菩薩神通力故令持經者皆悉得見。(四八二、三)

行者を禮し經を誦し心身の罪過を懺悔するに依つて普賢菩薩は其御姿を行者の前に示さるゝ、其時の普賢菩薩の御姿は身相端嚴三十二相を備へらるゝ、微妙の御姿である、前にばんやりとお姿を見て居つたが、今は明瞭に其尊き姿を眼前に見ることが出来たのである、然し但其御姿を見た丈では満足することは出来ない、そこで行者は普賢菩薩に何卒御指導を給はんと願ふのである。

信仰の足らない爲である。

是名始觀普賢菩薩最初境界。(四八三、六)

斯ふ云ふ様な風になつて、僧寶たる普賢菩薩に御指導を蒙る様に爲ることが、此經を修行する最初の境界である、自我憐れの中には一心に佛を見奉らんと欲して自ら身命を惜まざれば、我及び衆僧俱に靈鷲山に出で、汝等の前に姿を見せるとお説に爲つて居るが、本佛世尊の御姿を見奉る迄には一寸簡單には行かない、此經には其順序が詳細に御説き遊されてある、最後に本佛釋尊の御姿を見るが、其迄に最初に僧寶たる普賢菩薩を見ることを得、其指導に依り懺悔滅罪して諸佛を見奉るが、始には夢の中に諸佛を見、次は現實に諸佛を見奉るが、諸佛の中には始に東方の諸佛、次に南方の諸佛、十方分身の諸佛、多寶佛塔、本佛釋迦牟尼佛と云ふ順序に、罪障の消滅して行くに随ふて段々と本佛釋尊に近寄つて行け

是時行者見諸菩薩身心歡喜爲其作禮白言。大慈大悲者愍念我故爲我說。

法。(四八三、三)

普賢菩薩の御姿に接し歡喜踴躍し其御前に禮拜して、法を説き給へと御願する、それに對して、説是語時諸菩薩等異口同音各說清淨大乘經法作諸偈頌讚歎行者。

(四八三、五)

行者の願に依て普賢菩薩は大乘經典の甚義を説き聞かざるゝ、今迄は自分等不充分的の頭で經文を誦し理解しつゝあつたのが、今は直接普賢菩薩の説法を聞き得るに至つたのである。丁度從來講義録で講習して居つたものが、直接講師より講義を聞く様に爲つた様な譯である、其領解の度が隔段の相違あることは想像に難くないであろう、我々の信仰は斯る處迄行かねばならぬ筈である、それが行かぬのは

様に相成るのである、自我憐れは一句の中に纏めてあるから直に本佛に御出値申す事の出来る様に説かれてあるが、詳細に説けば今經の如き順序に爲る譯である、兎角圓教一乘の教を信するもの、頭には即身成佛とか速成頓成と云ふ様な言葉が先入主と爲つて手軽に考へる僻があるが、自分達の宿業の因縁を計算に入らずして考へて居つては甚しき誤算であらう、自分達の悪業の因縁を解決する丈の努力は必要なる事であり、その努力が無ければ即身成佛も速疾頓成も遂に空想に終るであらう、今經は宿業の因縁を解決する爲に六根懺悔の法を説き、此を實行せしめて見佛聞法の途を開きたるものである、此最初の境界に入つて漸く信仰の門口に到達し得たのである。これから其奥の院に達するには更に更に數段の大奮勵を要する次第である。

法華經七譬の意義

大僧正 本 多 日 生

1序説、2三界火宅の譬、3長者獅子譬、4一雨三草の譬、5化城寶筏の譬、6醉人墜珠の譬、7輪王寶珠の譬、8良醫治子の譬

一、序 説

今日は「法華經七譬の意義」と題して、法華經にあらはれた大きな七つの譬の意味合をお話して、そこに法華經の精神の在るところを把住するやうにしたいと考へるのであります。

譬論といふものは或る場合には軽いものであるけれども、法華經にあらはれた譬論は、譬論その儘が教であつて、傳教大師は「譬論即法なり」と解釋をせられた。譬論は譬論ではない、それがその儘教である、教をわかり易く譬論によせて示すのであつて、譬論が決して譬論で終るものではない、必ず「合譬」といつて、譬論と法とを合せて、さうして其意味が明

かになつて居るのである。普通の人が譬へを引く場合には、その事柄と譬へとが離れて居る事が随分澤山ある、それから又譬論には分論、全論といふことを佛敎で言ふが、一部分の譬論と全體すべてを譬へて行くのとの二つがあるのである。さういふ事柄に就いては佛敎は非常に譬論に關してその意味が發達をして居るのであつて、元來印度の文化に於ては、「因明」といつて物の眞理を判斷するに四つの組立になつて居る、西洋の論理は三段式であるけれども、印度の因明はモウ一つ譬といふものが這入つて居る、即ち喻量といふものが這入つて居る。一切の眞理を論定する場合には必ず一つ譬論を入れて自分の主張を明かにすることが、すべての論議の場合に行はれ

て居る。その位であるからして譬論に關する文化は印度には特に進歩して居つた事を認める譯であるが、その中に釋迦如來は又譬論に於て卓越したる達人であつたのであります。話の上手に出来る人といふものは、必ず譬論を自在に應用するものである、それは平生から考へて置く場合もあるけれども、考へないでも譬論が飛び出して来る。私共は小さなものであるからその例にはならぬけれども、私は演説をさかんにする、けれども豫め譬論を考へて居つたことは殆んど無い、その事柄を話して行く間に、さうも意味が不鮮明で聽衆の意識に映らないナと思ふと、頭腦の奥の方から「譬を出せ〜」といつて、自然に譬論を送り出して来る、それからその譬論を話すといふやうな場合がよくある。これは多くの人に就て研究して見たならば、譬論の心理能力の發達した人と發達せぬ人とは非常にそこに相違があらうと思ふ。或る時骨相學の先生が來て私の頭を押へて「あ

なたは非常に譬論性が發達して居る」といふ事を言ふたことがある、「そんな事がわかりますか」と聽いて見たら「イヤわかる」と言ふ。それは骨相學の方の研究にもさういふ事があるものと見える。それだから釋迦様の頭を押へて見たなれば、譬論性のあるところが非常に高くなつて居つたに違ひない。お釋迦様が一切經に亘つて譬論を應用せられたことは實にさかんなものである、又譬論經などといつて譬論ばかり説かれたお經もあり、丁度落語家が落語をするやうな調子に、譬論ばかり或る寓意を以て話されたお經が今なほ遺つて居る。それがなか〜巧妙な諷刺的な譬論であつて、やはり滅びない文化の産物として遺つて居るのであります。

その位であるからして、釋尊の説法には大事の場合になつて來ると必ず譬論が出て來る。最初第一回の説法の時分でもモウいきなり譬論を應用せられた、それは蓮華の譬論である。さうしてこれはモウ飛び

切上等、取つときの譬論ちやと釋迦如來が自から言はれた、我が一代運用したる譬論は無数にして數へ切れぬけれども、一番價值のあるのは蓮華の譬論であると言はれて居る、さうしてそれが最後の法華經に來てもこれを遺して、法華經の大精神を譬論であらはず時分にも「妙法蓮華經」といふ蓮華といふ言葉を探つた位である。この事も法華部内の大法鼓經といふお經の中に、釋尊みづから言はれて居る、一代廢經を通じて釋迦が運用したる譬論一つを舉げれば蓮華である、妙法蓮華である。その妙法蓮華の中のこの蓮華の譬論があまりに多含的であるから、それをいろ／＼と説きわけたものが法華經の七つの大きな譬論にわかれて出て居る。その他の細かい譬論は法華經の中にまだ澤山ある、藥王品の中には、「渡りに船を得たるが如く、病に醫を得たるが如く、暗に燈を得たるが如く」といふやうに、一枚の中に二十も三十も譬が出て來る位で、それは盛んなもの

に領解することが出来る譯である。さういふ意味に於て法華經の七つの譬論の精神を御紹介しようと思ふ。これは孰れも相當長い譬論であるし、意味も豊富であるから、短時間にお話することは無理だけれども、極く簡潔にその要點だけを把握するやうにしたいと思ふ。

その七つの譬論といふのは、

- 第一 三界火宅の譬 (譬論 11品)
- 第二 長者窮子の譬 (信解 11品)
- 第三 一雨三草の譬 (藥草論 11品)
- 第四 化城寶渚の譬 (化城喻品 11品)
- 第五 醉人鬘珠の譬 (五百弟子品)
- 第六 輪王鬘珠の譬 (安樂行品)
- 第七 良醫治子の譬 (書量品)

この七つである。それでこの七つの譬を最初に撰り出した人は、有名な天親菩薩といふ、龍樹天親と並び稱せられるところの大論師が印度にあつた、その

であるけれども、さういふ小さな部分的の譬論でなしに、今の全論としての堂々たる長い譬論——さうして譬論が自から教の精神を言ひあらはしたるものが七つある、これを法華の七譬といつて有名な事になつて居る。それは蓮華の一つの譬論でビタリと領解してしまへば間違ひはないけれども、いきなり「妙法蓮華經とはさういふ意味か」と言はれると、坊さんはじめ「マゴ／＼して居る、在家に至つては大まごつきである」「ちよつと待つて呉れ、サウ簡單に言へるものぢやない」「それぢやどの位引伸したら言へるのか」「それは引伸してもちよつと言へぬ……結局言へぬといふことになる。それで蓮華の譬論はまことに宜しいが、蓮華の譬論一つで法華經を領解しようとする、法華經の多含的なる豊富なる精神を十分に把握する事が出来ないから、先づ七つの譬で領解をして、今度それを持つて來て蓮華の譬論の中にこの七つを納めて見ると、初めて蓮華の譬論を完全

人が法華經に熱心な人であつて「法華論」といふものを書かれた、その法華論の中に藥草論品の所へ行つて、この七つの譬の精神を簡單に評論されて居るのであるが、その事は後に一つ／＼の譬に就いて御紹介をすることにする。併し天親菩薩の評論は或る一部を言ふのであつて、私が今日御紹介するほど詳しいものではないのである。

一、三界火宅の譬

第一に譬論品に説かれた三界火宅の譬といふのはさういふのかといふと、茲に大きな家があつて、その家がモウ早や朽ち故りて、軒も傾き柱も腐つて居る、床もボコ／＼といふやうな譯で、さうして内には蜈蚣も居れば蟻も居るといふやうな荒れはてた家だけれども、而もなかなか大きな家である。そこに大勢の子供が居つて家の内に遊んで居る、其家のお父さんは他所へ行つて留守であつた、子供等は玩

具に氣を取られてワイ／＼言つて夢中になつて遊んで居る、人形の首の缺けたのや、虎の足の抜けた奴を持つて、互に引たくり合ひをしたり、喧嘩をしたりがヤ／＼やつて居る。或る日父が他所から歸つて見ると、その大きな家の床下に火がすつかり廻つて、今や將に火事が起らうとして居る。それから驚いて門の外から子供達に向つて、「そんな玩具に氣を取られて居つてはいかぬから速く出る、床の下には火が廻つて居るぞ」と言つたけれども、子供は平氣で、火が廻つて居ると言はれても別に怖いとも思はずに、やはり人形や虎の奪い合をしてガヤ／＼やつて居る。そこで父は如何にしてこの子供等をこの火宅より救ひ出すべきかといふ事から、そこに方便を設けて、子供等がふだん日頃欲しがつて居つたところの、鹿の車や羊の車小牛の車のやうな小さな車——子供はあゝいふ車を非常に悦ぶもので、それは虎の首の缺けたのや、人形の手足の抜けたのより子供としては

數等欲しい譯であるから、「そんな首の缺けた虎などほかして置いて早く門の外に出さへすれば、羊の挽いた車に乗せてやる、鹿の車もある、仔牛の牽いて居る車もある、その三つの車を澤山買つて来た、早く出た者が選り取りちや、後から来たなら無くなつてしまふぞ」と言つた。それを聞いて子供等はワ／＼と言つて一人も残らずその火事のゆき居る家から飛び出して来て、門の外へ出た。すると父は門の外に出て静かに言ふには「お前等は彼處で玩具に氣を取られて居つたけれども、あの家は既に火が廻つて居るから、今に火事が起つて焼き殺されてしまふ、それで鹿の車や羊の車を買つて来たと言つてお前等を誘ひ出したけれども、それは此處には無いのだ、併しそれより安全なモツと大きな車があるからこれに乗せてやる」といふので、大白牛車といふ大きな安全な、汽車みたいなものに子供等を皆乗せて、さうして平和安全の地點へその子供を運び去つた。斯う

いふ譬が出て居るのであります、これを三界火宅の譬とも、又は三車大車の譬とも言ふので、二つの意味がある譯である。

その大きな朽ち故りた家といふのは何に譬へたかといふと、この人生に譬へた。その内に居る子供といふのは我等人類である。玩具といふのは物質慾の事である、「刺身が食ひたい」「ビールが飲みたい」といふやうな物質慾の争奪の爲めに喧嘩をして、さうして火が廻つて居るのを知らない。火とは何を指して居るかといふと、人生の深刻なる苦痛を言ふのである、それは釋迦如來が喝破して居るところの生老病死、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦等の四苦八苦といつて、人生貧富貴賤を問はず、如何に社會を改善をしても免れることの出来ない必然の運命を有つて居るところの人生の缺陷があるのである。それはどんな身分の高い者でも、地位のある者でも、非常に深刻なる苦しみを齎し來るのである、北白川宮殿

下が巴里で御薨去になつたことの如き、その内親王殿下の御苦痛を考へ、又御薨去になつた宮殿下の事を考へても、前途非常なる希望を懐いて佛蘭西に學問に御出でになつて居つたのであらう、それがちよつとした自動車の舵の取り方であゝいふ結果が現はれて來る。その悲嘆といふものは實に人生に免れ難い事であつて、斯様の事が人生には多いのである。今日の新聞にも出て居つたが、有島武郎といふ人はなか／＼立派な人だと思つて居つたが、それが情死をして、首を縊つて死んで居つた、死體はもうすつかり腐つて居るといふやうな事が出て居つた。私丁度今朝汽車で遠方から歸つて來たのですが、途中汽車の内で有島君をよく知つて居るといふ人が居つて、「此の間一ヶ月ほど前に會つたばかりだ」といふ、「それでも新聞に出て居る、この通りぢや」と言つて見せたところが、「死んだかナ」と言ひ居つたが、左様な譯で、人生の事は頭は禿げて居つてもなかな

か油断はならぬ、頭は禿げて居つても女と情死して首を縊つたりするやうなものである。さうして後には女房は無いが子供は三人かある、年老つたお母さんもある、その悲嘆は容易なものではない。さういふ深刻なる事が次から次へと現はれて来るのである。そればかりではない、すべて「求めて得ざるの苦しみ」といふものは、如何なる事にもあるのである。これは労働問題に於ても、國運の進展をはかる上に於ても、なか／＼それは求めて得難い所があつて、行きさうで行かぬものである、どうしても人間の希望といふものは、行きさうに見えてもう一いさといふ所で外れることがある。日本の經濟上の状態を見ても、一時は大變に工合が良かったものであるから、モウ一つ、モウ一つと思つて行き居つたのが遂にドカ／＼と來た、それで皆吃驚して居る、労働運動などにしても、大分經濟界の景氣が好いから労働者の方で突つ張つて、やれ／＼と言ひ居つたのが、ガラ／＼と反動が來て今度は失業者が澤山出るとい

ふやうな事になつて居る。或は世界の事で言へば獨逸が非常に國運が隆昌になつて、世界が併呑出来るやうに思つてやり出したのがひつくり返つて、今ではあゝいふ悲惨な狀況に陥つて居る。大きくも小さくも皆同じ事で、人生はサウ順調にのみ行くものではない。大觀すれば「それはやり損つた奴が馬鹿だ」といふ事になるかも知れんけれども、サウ／＼やり損はぬ程の賢い者ばかりが續いては出ない、親父は賢くても息子は馬鹿が出て來る、女房は賢くても亭主は飲だくれといふやうな工合で、組合せが悪いものであるから、兎角やり損ひをしては「イヤこれは／＼……」といふことになる。左様にしてこの人生の缺陷といふものはなか／＼通れ得ないからして、そこを火事に譬へたのである。東京のやうな都會では殊に火事を出さぬやうに皆が注意して居るし、消防の設備も随分進歩して居るけれども、それでもなか／＼火事が絶えないやうなもので、人生の缺陷といふものは容易に通れ得ないものである。

在病報國論

環境病撲滅法企策居士事

醫學博士 石田 誠

抑々人生の目的は何であるか？と云ふに、それは人間各自の能力と性質によつて其の境遇に最もよく適合した天職に精勵することである。政治家に適合した人が代議士となり、工業家に適合した人が工業に勉勵し、美術家に適合した人が繪を描くと云ふことは所謂、天職に精勵する人であるが、小にしては家族のためとなり、延ては國家の興隆を助け、社會の進運に貢獻することになるのである。其の他彼の幼児が温き慈母の手に抱かれて乳を飲んで居るのも、惡戯をして無邪氣に遊んでゐるのも、老人が危い腰つきで杖にすがつて神社佛閣に参拜するのも、スポーツマンがグラウンドを走るのも、夜泣きうごん

が寒い街頭に屋臺店を引いて通るのも、凡て是れ皆各自の能力と性質に據つて其の境遇に相應した天職に精勵して居る聖い姿である。活動の充分出來得る人が一度疾病に襲はれて「病氣のために日夜病床に呻吟し、何等國家社會に貢獻することが出來ないのは洵に申譯なく、且、生き甲斐のないことである」といふ嘆聲は吾人の屢々耳にする言葉である。果して然らば病者と云ふものは何等、社會的貢獻をせず、徒らに空しき月日を送り、無意義の經費を消費して居るであらう？ 此れを深く考究すれば、如斯き考へ方は大なる誤

認であること、知らねばならない。

健康者は健康者として能力と性質とに依つて其の境遇に適合した天職があると同じく、病者にも亦病者としての能力と性質とに適合した一定の職責があり病者の務がある、健康の回復、生命の更生、此れ病者としての社会的大事業であり、病者の天職である。空に聳ゆる高樓には必ず強固なる基礎工事が施されてある。健康の回復はあらゆる活動の基礎となり源泉となるのである、安静を守り、營養を攝取し、薬を飲んで病氣を療養することは、病者としての能力と性質と境遇とに最もよく適合した天職であり責務である。

彼の浄土宗の開祖法然聖人は病患を得て偏に是れを喜びたまひ、眞宗の中興蓮如上人は、病中にあつて法然聖人の如く是を喜ぶことの出来たため、自ら自己のあさましく、恥づべき事を悲みつゝ、歸つて無耻無讖の自己が絶大の救済にあづかることを感謝せ

られた。是れは極めて一見簡單ではあるが、此の二聖が示された教訓は宏大なる不磨の大事蹟である、健康に處して、其の能力と性質と境遇に依つて専心職に盡すことは國家社會の進歩發展を助けることになる。病者が疾病より惹起る種々の愚痴を感裡より去つて、健康の回復、生命の更生に専念精進することとは、在病報國の第一義諦である。病床にありながら健康當時の出来事を想ひ出し健康者の活躍状態を徒らに羨望し、健康當時の如く活動の出来ざること悲観するが如きは、自己の現在に於ける性質及び境遇を知り得ない迷蒙の徒であらねばならぬ。

畏くも、明治天皇の御製に

國思ふ道に二つはなかりけり

いくさのにはに立つも立たぬも

と云ふ御聖訓がある如くに報國の道は、健康者のみに決して限られてはゐない、病者にも亦病者としていろ／＼の務めがある、一片の肉を食し、一服の

藥劑を服用することも、是れ即ち報國の一端ではあるまいか。

罹病、遂に重く今正に死せんとする病人が、斷末魔の苦しい沙氏型呼吸をして居るのも、斯うした場合に於て、それより以外に、よい方法の無い以上は矢張り其境遇に相應した、其の人の天職がいよ／＼終局の務を營んで居るのだと看することも、あえて誤視でもあるまい。

我國に於て結核病の爲に年に死亡する數は凡そ十萬を算せられて居る。是等、國民の中堅が消費する国力は又巨大なものである。是等の患者が、偉大な自然の力と合理的の醫療に依つて、自己の健康を回復し、生命の更生を計ることは目下の能力と性質と境遇に最もよく適合した最大の務である。病にありて病より解脱し、自己生命の更生に盡すことは、彼の台閣政堂に於いてする争よりも、名に惚れ利に走る健康者の事業よりも蓋し如何ばかり神聖であり、

高尚であり、國家的であり將又社會的貢獻になるか知ればしない。

罹病諸士、徒らに自己の不遇を悲観するよりも尙一層在病報國のために勇ましく療養の持續に努力せられん事を切に希望して止まざる次第である。

(右は石田博士が在院の一患者に談られた一節である、S生)

甦つた妙教婦人會

國友師法華經講義

名古屋市常樂寺内妙教婦人會は教化會館を擁して毎月八日を期し例会を開き毎會何れも有意義に開催して来たが、國友日就正が奮然より特に力を注ぎ毎回その藹奥せる處を傾けて法華經現代語簡譯講義を開始し、會員の信仰を益々高め熱せしめてゐる第一回は、「無量義經」を講じ、第二回一月八日は「序品第一」に及び、二月より更に方便品以下を論釋することになり、之がため會員は激増し、音日の繁榮を再び振り返し、ますます内容的に外形的に發達し、中京各婦人會から異常の興味を以つてその發展運動を矚目せられてゐる。

聖訓摘要 (第九)

大僧正 本 多 日 生

義淨房御書

されば今經の所證は十界互具百界千如一念三千と云ふ事こそ由々度き大事にては候なれ、此の法門は摩訶止觀と申す文にしろされて候。次に壽量品の法門は日蓮が身に取つて頼みあることぞかし、天台、傳教等も粗しらせ給へども言に出して宣べ給はず、龍樹、天親等も亦斯の如し。壽量品の自我偈に云く、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず云々、日蓮が己心の佛界を此の文にて顯はすなり。其の故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事此の經文なり、秘すべし秘すべし。

(遺文錄九六五)

この所には、一念三千の事は壽量品の「一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず」といふ經文を以つて説明するのが日蓮の偉勳であるといふことを書かれて居る、普通一念三千の法門と言へば方便品の諸法實相の文で解釋するのであるけれども、それは天台の議論である、自分は壽量品の一心欲見佛云々といふ經文に依つて一念三千、三大秘法を説明するのであるといふことを日蓮聖人が言うて居られる。これは非常に注意すべき點でありまして、精しい話はして居ると長くなるから致しませぬが、大事な點であります。

如説修行鈔
顯佛未來記

これは何れも「聖訓要義」として全文を詳細に御紹介しました。

富木殿御返事

御勘氣ゆりの事御歎き候べからず候、當世日本國仔細之れ有るべき由之れを存す、定めて勸文の如く候ふべきか。設ひ日蓮死生不定たりと雖も、妙法蓮華經の五字の流布は疑ひ無き者歟。(遺文錄九七九)

といふことを富木殿に言ひ送られた、日蓮が佐渡に流されて既に足かけ三年になつて居る、この文章を書かれたのは七月六日とありますから、既に文永十年の夏を迎へて居る譯で、大分永い、モウ赦されて鎌倉に歸り給ふ筈だかと思つて、富木殿は待つてお居でになるだらうけれども、日蓮が御勘氣を赦されたいのは決して嘆くことはない、寧ろ日蓮が佐渡ヶ島に於いて死んでも何も嘆くことはない、それは必ずや日本の國家に大事が起つて、立正安國論に書かれた通りに、國家の大事に覺醒めて日蓮の教に來る時があるであらう、日蓮は何時死ぬか判らぬけれども、法華經の弘まることだけは最早や疑ひを殘す所はない、日蓮は死んでも法華經が弘まりさへすれば本願成就であるから、何も佐渡ヶ島から赦されないと云つて嘆くことはないといふことを仰つて居るのであります。

波木井三郎殿御返事

但し佛滅後二千餘年三朝の間數萬の寺々これあり、然りと雖も本門の教主の寺塔、地涌千界の菩薩の別に授與し給ふ所の妙法蓮華經の五字いまだこれを弘通せず、經文には有つて國土には無し、時機の未だ至らざる故歟。(遺文錄) (九八三)

これはお釋迦さまが入滅になつてから、天竺、支那、日本に渡つて澤山のお寺が出来たけれども、久遠實成の釋尊を本尊にして居る所が無い、經文には書量品に於いて久遠實成の本佛が顯はれなければならぬやうになつて居るけれども、この世界にはそれが弘まつて居らないといふことをお書きになつた。これは屢々申すやうに日蓮聖人の大事な教であつて、「本門の教主の寺塔はこれ無し」といふことが日蓮聖人の最も遺憾に感せられた點である、本尊鈔もやはりこの意味から書かれて居る。

經王殿御返事

この中にも結構な御教訓があります。

劍なんども進まざる人の爲には用ゆることなし、法華經の劍は信心の健氣なる人こそ用ゆることなれ、鬼に鐵棒たるべし。日蓮が魂を墨にそめながして書きて候ぞ、信させ給へ。佛の御意は法華經なり、日蓮が魂は南無妙法蓮華經にすぎたるはなし、妙樂云く顯本遠壽を以つて其の命と爲すと釋し給ふ、經王御前には禍も轉じて幸となるべし、相構へて御信心を出し此の御本尊に祈念せしめ給へ、何事か

成就せざるべき。(遺文錄) (九八六)

如何に劍が良くとも用ひる人が悪るければ駄目ぢやといふことをお書きになつて居る、干將莫耶の名劍と雖も用ひる人が悪ければその用を爲さない。その通りで法華經は銘刀の如くであるけれども、之れを信する人の信心が足らなかつたならばやはり駄目になる譯である、「法華經の劍は信心の健氣なる人」——健氣といふのは強盛といふことで、信心の確かりした人が持たなければ役に立たん。若しも信心の健氣なる人がこの法華經を信じたならば鬼に鐵棒たるべしと言はれた、如何にも能く判かる教であります、法華經は鐵棒であつても持つ人間がヒョロ／＼であつては何にもならない、持つ方も同じやうに自分自身の力は飽くまで之れを奮ひ起して、己の力のあらん限りを發揮して、そこに更に法華經の力が鐵棒として加はつて來なければならん。大体宗教といふものは一切を他力に持つて行つて、自分の力が無くとも助けられるといふやうなことをいふ、その方が非常に樂なやうであるけれども、それは大變悪い行き方である。鬼に鐵棒といふのは自力の方の努力が確かりして來ること、他力の方が確かりして來ることとの二つで、之れを「自他の妙合力」と言つて居る、兩方が合する所に妙があるのである。大体宗教といふものはさうだらうと思ふ、西洋の「レリジョン」(宗教)といふ言葉の意味を研究して見ると、結びつくといふことである、自分の信仰なり自分の本來有つて居る尊いもの、佛性といふか、靈光といふものが發現して、さうして向ふにある絶對の偉大なるものと結びついて、自分の一番上等な物と宇宙の一番上等な物と結びついて、そこから出て來るといふのが宗教の意味になつて居る。こちらは全然何もしないで、向ふからばかりやつて呉れるといふならば、宗教などは弘めなくても宜い、ドン／＼人間を捕へて天國にでも極樂にでも

抛り込んだらそれで宜い譯である、安養世界なら安養世界に阿彌陀様が救ひ取つて呉れるといふならば、何も死ぬまで待つて居ることはない、生きて居る儘で安養世界に抛り込んでしまつたら宜からう。併ながら宗教はこの兩方の協力する所にあるとするならば、自分の方も一番よき力を奮ひ起し、上からも一番大きな力が来るやうにしなければならぬ。丁度學校で教育するのに、先生も立派であり、さうして生徒も十分立派な素質を有つて居つて、それを啓發することが好い工合に行かなければならぬのである。又本人自身も志を立て、奮發して行かなければならぬ。餘りに先生任せといふことでは却つて發達することが出来ない。又親に委せるといふのも、子供は少しも奮發せずに親の言ふ通りになつて居ると、親が死んだ時その子供はまるきり役に立たぬ者になつてしまふ。それで宗教は唯だ自力だけでもいかん、禪宗のやうに何の力にも依らぬといふやうなことは、宗教としては少し足りない、又淨土門のやうに純他力も足りない。そこで日蓮聖人のやうに鬼に鐵棒たるべしといふこれが一番よいのである。法華經主義は鬼に鐵棒主義であるから、自分自身も奮發して出来るだけはやはり努力しなければならぬ、自分も勵まなければ、唯だ「委してあるのだから」といふことに依つて、自分の力が抜けるやうなことがあつては駄目だと思ふのであります。

辨殿尼御前御書

貞任は十二年に破れぬ、將門は八年に傾きぬ、第六天の魔王十軍のいくさを起して、法華經の行者と生死海の海中にして同居穢土をとられし奪はんと争ふ、日蓮其の身にあひあたりて大兵を起して二十

餘年なり、日蓮一度も退く心なし、然りと雖も弟子等檀那等の中に臆病の者大抵或はをち或は退轉の心あり、尼御前の一文不通の小心に今まで退かせ給はぬこと申すばかりなし。(遺文錄 九八七)

これは短かいお手紙であります、辨殿尼御前といふ方が、女の身でありながらいふの迫害の中に立つても信心を退轉せずして、貫き通されたことを褒められたので、續いて日蓮聖人の決心が能く現はれて居る。貞任は十二年戦つたけれども遂に合戦に負けた、阿部貞任と言へば中々えらい大將であつたけれども、結局は負けた、面白くない。平將門も非常に強い武士であつたけれども、八年にして遂に倒れた、負けては駄目だ。日蓮は第六天の魔王が十軍のいくさを起して、或は政治家の頭腦に入り、或は各宗の僧侶の頭腦に入り、民衆の頭腦に入つて法華經の行者を惱まし、非常な大きな戦ひを起して今日に至る迄二十餘年の歲月を経て居るけれども、日蓮は一度も退く心を起したこともない、一度も敗北はしない。併ながら弟子や信者の中には或は退轉し、或は信仰を擲つ者もあつたのであるが、あなたは少しも退轉しない、尚に立派な人であるといふことを言はれた。この貞任はえらかつたけれども負けた、將門も負けた、詰らぬと言はれる所に日蓮聖人の面白い所があると思ふ、幾ら迫害に遭つても頭の座に据えられても日蓮は勝つて居る、「頭斬るべくば早く斬るべし」と言つて居る所にあゝいふ天變があつて生き永らへた、佐渡ヶ嶋に於ても殺さうと思つて居つたのが殺すことが出来ない、遂に佐渡ヶ嶋からお歸りになるのであります。それから、最後に「立ちわたる身の浮雲も晴れぬべし」と詠つて御臨終になつたのであります。日蓮は生きて鎌倉に歸へすべからず」と言つて居つたのを、日蓮聖人は生きて鎌倉に歸つた、即ち勝利の氣

歌を奏した譯でありませぬ。又今日となつて考へて見れば、鎌倉幕府は倒れて跡無し、日蓮の思想、日蓮の信仰は將に大いに勃興せんとして居る、この點に於ては勝利も勝利、大勝利であります、日蓮を迫害したる三百人の武士いま將何こにありや、その名前も知れない譯である、依智三郎直重と言つても日蓮聖人に依つてその名前が傳はつて居るので、日蓮聖人の頭斬の役になつた御蔭で依智三郎直重といふ名が後代歴史に残つたのである。その點を考へると實に日蓮聖人が勇ましく、「一度も退く心なし」と言はれた點は、日蓮主義者の服膺すべき所でありませぬ。「眞任も將門も負けた詰らぬ奴だ」と言へる所に日蓮主義があるのである、自分がヒヨロ〜では中々さういふことは言はれない譯である。

この間も一寸面白いことがある。大阪に於てこの頃労働運動が熾んに起つて居る、住友の鑛工所に於いてストライキを起しいろ〜の要求をやつたが、それに就いて始めは賛成しない者も段々あつたけれども、強硬な者がいろ〜運動をしたり或は脅かしたりして皆判を捺さした、最初會社の方に内通をして「自分はストライキ運動の判は捺さない」と言つて居つた職工の所へも押しかけて行つて、それ等の者も仲間の中から窘められるので、社員所に逃げ込んで行つて「私もどうも斯う窘められては仕方がないから判を捺さうと思ひます」「ア、それは捺すが宜い、判を捺さない爲にお前が酷い目に遭つては詰らないから捺しなさい」と言つて、會社でも勧めて捺させた、所がどうしても一人捺さぬ者がある、それから「それでは却つて危ないから」といふので社員の方で呼んで「お前も捺さないで大變だから捺せ〜」と言つた、所がその男が言ふには「自分は心ならぬさういふ判は捺さない、自分は日蓮主義者である」と言つて、どうしても肯かない、何千人といふ大勢の職工が全部一致して居る所に、一人それが最後までどうしても捺さ

なかつた、それでそれが今非常な美談になつて居る、この間名古屋の三菱内燃機會社の社員の中といふ人が大阪に行つて、さういふ問題を調査して來て私に話をされた、住友鑛工所に於いて斯ういふ實例がある、どうも日蓮主義者は鞏固な決心を有つて居るものと云つて、皆呆れて居つたといふことでありませぬ。マアその事の善し悪しはどうか知らんけれども、兎に角さういふやうに日蓮主義者はなまくらではいかん、本當に正しい意味に徹底した時に於ては、最後まで貫き通して日蓮聖人の御名を傷けぬやうにしなければならぬと考へませぬ。その人の名前は聞いて置かなかつたけれども、これは是非一つ調べて日蓮主義者の中にさういふ名前は傳へて置きたいと考へて居ります。

當 體 義 鈔

これも既に全文を御紹介してあります。

大僧正 本多日生猊下著

本 尊 論

布袋一部金七拾錢
送料 金四錢

名古屋市東區田代町字城山七七

統 一 編 輯 局

編 輯 局
電話名古屋一〇八一九番

生佛一如

田久保本誓

宗教の本質はここに特筆するまでもなく超人間的なるものと人間との關係にあると思ふ。而して我々が信仰の最大目的も解脱すること、佛と一如することとその最大目的であらねばならぬ。

佛教に於ては此の超人間的なものを悟者とし人間をば迷者と名ずける。で此の迷者たる人間の宗教的要求は要するに自己に對する要求である、自己の生命に付ての要求である。我々の自己がその相對的にして有限なる事を覺知すると共に、絶對無限の力に合一して之によりて、永遠の生命を得んと欲するの要求である。ロバートソン、スミスも云へる如く「宗教は個人が超自然力に對する隨意的關係でなくして一社會の各員がその社會の安寧秩序を維持する力に

對する共同的關係である」の言の通りであると思ふ。

ここに於て凡ての宗教の本には佛(或は神)人同性の關係がなければならぬ、若し悟者と迷者とは其根底に於て本質を異にし、單に悟者は人間以上の偉大なるものとするならば我々は之に向つて宗教的動機を見出す事は出来ない。或は之を恐れその命に逆はぬ様になす事はあらう、或は之に媚びて福利を求め事にはあらう。是等はすべて利己心の變形に過ぎないのである、徒らに現世利益の爲に佛に祈ると云ふ事は眞の宗教心ではない。宗教的要求は我々のやまむとしてやむ能はざる大きな生命の要求であるのである。肉体的生命の總を悟者の前になげ出し、悟者によりて生きむとするの情でなければならぬ。

日蓮上人が造ばされたる不借身命の御活動は、本化上行菩薩としての御自覺に基因するでもあらうが、又此の如き宗教的觀念よりして超人間的なものとの融合渾一した心理状態からであつたとも見られる。種々振舞御書に

無量劫よりこのかた親子のため所願に命をすてたる事は、大地微塵よりも多し、法華經の故には未だ一度もすてず……此の身を法華經に替ふるは石に金をかへ糞に米を替るなり云々。又
日ごろ月ごろ思ひもうちたりつる事はこれなり。
さいわひなるかな法華經のために身を捨てん事よ。
臭き頭を削らるれば沙に金をかへ、石に珠を買易へるが如し。云々

とあるが如く上人の心中にはあらゆる有限なもの時間的なものは存在しない、上人自ら永遠であり、自らが無窮であるのである。たとひその個人的生命は滅しても更に大なる生命との合致によりて救はれ

たのである。之を心理學上より見るならば、我々の客觀的世界に對して主觀的自己を立て、之によりて前者を統一せんとする間はその主觀的自己は、いかに大なるにせよその統一は未だ相對的たるを免れない。絶對的統一とは唯全然主觀的統一を棄てて、客觀的統一に一致することによりて得られるのである。

而してかくの如き意識統一の頂點即ち主客合一の状態と云ふのは常に意識の根本的要求であるのみならず、又實に意識本來の姿である。コンヂヤツクが云た様に我々が始めて光を見た時には、之を見ると云ふよりも寧ろ我は光其者であるのである。又小兒にとつて最初の感覺は宇宙そのものでなければならぬ。この境地に於ては未だ主客の分離なく、物我一體の一事實あるのみである。我と物と一であるから更に眞理の求むべきものなく、又欲望の滿すべきものもない、人は佛と共にあり佛は人と共にあり、理

想の淨土とはかくの如き境を云ふのであると思ふ。かくして宗教的要求は人心の最深最大なる要求である事がわかつた。我々には種々の肉体的要求や、精神的要求を持つて居る、而しそれは皆自己の一部の要求にすぎない。獨り宗教は自己その者の解決である、眞摯に考へ眞摯に生さんと欲する者は必ず熱烈なる宗教的要求を感せずには居られない。

ここに於て日蓮主義より見たところの、迷悟兩者の關係は如何と云ふ問題に到達する。迷者と悟者ととの關係は譬諭品に示された如くに悉是吾子として父と子との間柄にあり、或は能化、所化として宗教的教化の關係があるのである。日向記の中に悉是吾子の「子」を釋して孝、不孝を分別せざる子云々とあり。又同書に壽量品の爲治狂子故の「子」は久遠下種を忘れたる物に狂ふた子云々とある。で前者は教化の有無に關せず、苟も法界衆生であつたならば、本佛の爲には所化の弟子であるとなし、又後者は本

の本佛である。而して此の本佛は壽量品の中に然善男子我實成佛已來云々と示された如くに、過去五百塵點劫以前本覺本有の常壽を体得し給ふた、之を「既に過去の不滅常壽を体得したところの本佛であるから、未來また無終に亘り生滅無常と云ふ事が無い。これを「未來にも生せず」と云ふのである。かくの如く過去未來ともに不生不滅の本佛であるとすれば、現在常住の義自ら明かである。次に下の「所化以て同体なり」とは、上にも述べたる如き所化の衆生と佛とは一体なるを云ふ。即ち生佛は共に不生死滅の常住体なる事を云ふのである。然もその同体は實に生佛に於て之を云ひ得るばかりでなく、能居の人と所居の土に於てもひとしく之を云ひ得るのである。何となれば正報の生處には依報の國土を具し、依報の國土には正報の生佛を具してその体終に一であるを以て然るのである。之を生佛不二と云ひ國土に就ては依正不二と云ふ。この生佛同体の原理あるが故

佛の教化に從はぬ逆縁の者であるのであるが、今この「所化」と云ふ内には此の兩者を包容するのである、されば久遠劫來の一切の衆生を攝する事となる。已に佛と一切衆生とは父子の關係あるとなればその本質に於て何等區別を認めない。彼の觀心本尊鈔の中にもこの意味合を示されてある、即ち

今本時の娑婆世界は三災を離れ、四劫を出でたる常住の淨土なり。佛既に過去にも滅せず未來にも生せず、所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足三重の世間なり云云

此の文によれば、所化能化同体なる事が確證される、佛過去にも滅せず未來にも生せず三世に亘り常住不變であつて、此の佛と衆生とは同体なりと云ふ文である。「佛既に過去にも滅せず未來にも生せず」とは、久遠本地初成の釋迦牟尼佛を本佛と云ひ、この佛はあらゆる諸佛を自己の運用と説き、之を開し、之を會して自己の一佛に統合歸一せしめた絶對唯一

に、十界互具百界千如「三千具足」の實を備ふ事となる。これよりして彼の一念三千の義理が立つのであるが、それは他の機會に譲り本篇では述べない。要するに如斯く眞の自己を知り、宇宙の本體たる佛を知り、佛と我等と融合一如するの境に達する時

あらばこれ信仰の極致であると思ふ。最後に一言附言する事は上來何れも衆生をば本位として、自己中心的説明を試みて来た。迷悟共に無差別一体なのであるから、いづれを中心としたとして異なる事はない様であるが、純理論的解釋であるから、これは天台流の觀察なる事を附言しておく次第である。

(以上)

△臺中教信

臺中新富町顯本法華宗布教所松輪妙明師は終始一貫して過去六箇半街路布教を爲し大に日蓮主義を鼓吹した奮闘家である十一月二十一日は布教所に於て法會を營み二十二日二十三日は毎夜七時より榮町二丁目三丁目の街路に於て「現代思想に就て」の注設法を爲し二十四日は秋季皇靈祭につき大旗幟鬼を行ひ二十五二十六二十七日は亦肥後屋吳服店前街路に於て「日蓮主義」につき布教を爲した。

各地教信

△京都通信 △十月三日上鴨正道館「自覚」中島孝治氏「信仰と修養に就て」金光孝碩師△十月十四日日本正寺「二樂會の發展に就て」金光孝碩師「我が國民性の長所と短所」杉村陸軍少將「佛界緣起と煩惱緣起」野口權大僧正△十月七日日本山統一青年會「所感」中村英俊師「教の教」金光孝碩師「所感」細野陸軍少將△十一月八日日本正寺二樂會「開會の辭」山田篤三郎氏「正しき理解」墨田支師「日蓮主義の第一歩其二」金光孝碩師△十一月十日日本正寺總會式「恩山德海」有田友道師△十一月廿一日上鴨正道館「行學の二道」中島孝治氏「信仰は力なり」金光孝碩師「日蓮主義」萩原日道師△十二月八日日本正寺二樂會「日蓮主義の第一歩其二」金光孝碩師「道者生存」陸軍少將細野長雄閣下△十二月十日日本正寺婦人會「人生の幸福」金光孝碩師△十二月八日十二月十日日本正寺に於て 聖上陛下御懷御平

運新願法要修行す△十一月十六日白須賀町妙壽寺御會式修行「宗祖の恩徳」山主高橋道碩師「信仰は力なり」金光孝碩師參詣者四百名餘盛大なり
△金澤教報 △教教會十一月四日日本長寺に於て「毎日の恩顧」能仁二十師△家庭講演十二月七日日本多町黒田氏宅に於て「心の悪魔と戦ひて勝て」能仁二十師△教教會十二月十二日立正寺に於て「釋尊傳續講」杉田常教師△青年團講演十二月十三日市外高尾村に於て「一人の力」能仁二十師△宗教講話十二月十三日夜同村に於て「佛陀の教」能仁二十師△宗教會十二月十五日日本覺寺に於て「新念の生活と宗教信仰」芝沼謙城師△家庭講演十二月二十日千日町宮極氏宅に於て「和樂の道」能仁二十師△宗教講演十二月二十二日本長寺に於て「本門戒壇の精要」能仁二十師△青年團講演十二月二十三日市外高尾村に於て「合奏生活」能仁二十師△教教會十二月二十四日本行寺に於て「日蓮主義の生活化」能仁二十師△天晴會講演十二月廿六日本長寺に於て「新りの生活」芝沼謙城師「法苑の跡を結びて」能仁二十師△家庭法話十二月廿八日本多町河合氏宅に於て「法華經最初の讀法」能仁二十師

十師△教教會十二月二十四日本行寺に於て「日蓮主義の生活化」能仁二十師△天晴會講演十二月廿六日本長寺に於て「新りの生活」芝沼謙城師「法苑の跡を結びて」能仁二十師△家庭法話十二月廿八日本多町河合氏宅に於て「法華經最初の讀法」能仁二十師
△大阪教報 十二月五日兼刀根山樂樂所に於て「現代思潮と日蓮主義」京藤布教師△同夜運藏寺に於て「若き人の臨終」木宮氏「信心と善徳」石井氏「常住の理を信ぜよ」京藤師「顯本法華の特長」和井田氏△十二日堂開寺に於て「七聖法華の即日奉上人」石井信一氏「日本國民使命」京藤氏△十八日朝蓮成寺に於て「新願法要」△十九日刀根山樂樂所に於て「現代思潮と日蓮主義」其二京藤氏△二十日堂開寺に於て「新願法要」△二十二日國民精神の發露」井口氏「信仰の意義」上田師△二十七日奉悼法要「國民覺醒の秋」京藤師「先帝陛下の徳を慕ひて」大庭中佐「昭和の使命」石井氏△二十九日蓮成寺に於て奉悼法要上田山主導師の下に嚴肅なる法要を修し上田師の奉悼文捧讀蓮成堂開兩寺禮徒立正結社員多數參詣願る盛會を極む

新刊廣告

大僧正本多日生現下講述

法華經の行者日蓮

佐渡塚原三昧堂、丈餘の雪に凍えて飢えて、而も「御佛の白き衣もて日蓮をおほはせ給ふか」と合掌し、龍口斷頭場裡「臭き頭を刎ねられて金色の如來となる、これ程の喜びを笑えかし」と宣ひし日蓮上人、今昭和の御代に本多日生現下によりて、法華經身讀の崇さを講述せらる。信仰の者には金剛の珠玉にも比すべき小冊子か、敢て同信の士に勸む。

一部金拾錢(送料共) 二十部金壹圓五拾錢(送料共)
五十部金參圓五拾錢(送料共) 百部金六圓(送料共)

發行所 統一編輯局
名古屋市東區田代町字城山七十七

振替記古屋一〇八一九番

來ル四月十一日ヨリ
十三日ニ至ル三日間修行

大法會

一、大正天皇御冥福奉薦會
一、國禱會法要
一、祠堂施主祖先靈法要
一、財團翼賛員祖先靈法要
每日 午前九時 法要
午後七時 說教
十一、十二、午後七時 講演
十三日午後七時 顯本健兒會大會布教師數名講話
右相營候條線合御參詣被下度此段
御案内申候也
追テ準備ノ都合モ有之候ニ付御參詣ノ人員大略四月七日迄ニ大法會法要部へ御通知願上候
京都市寺町二條下ル(電車本屋町五條乘替河原町二條下車西入)

總本山 妙滿寺

法要部
電話(上)八十六番
掛替口座大阪四六二五九番

社寺建築 及臺灣檜材の安價提供
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不十分なる檜材は于制狂ひ等の缺點多きものでありませ)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二〇番)

臺灣檜材の六大大特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整然木
- 六、木高稚色



目 次

法華經七譬の意義……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける観音賢經……………	井 村 日 成
聖訓摘要……………	本 多 日 生
現代語に簡譯したる無量義經……………	國 友 日 斌

第三十三號月三年二十三第

統一價定	
一冊	金貳拾錢
牛ヶ年	金壹圓貳拾錢
一ヶ年	金貳圓貳拾錢
送料共	送料共
前金之	前金之

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾圓
半頁	金五圓
四分一頁	金九圓
一頁	金五圓
前金之	前金之

昭和二年一月廿一日印刷納本 (第三百八十三號)
昭和二年二月一日發行

不許複製

編輯所 東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
發行人 國友日斌
印刷所 名古屋市東區千種町字五反田五二番地
三益社

發行所 統一發行所
名古屋市東區田代町字城山七十七番地
編輯所 統一編輯局
電長東五〇八七番
振替名古屋一〇八一九番